公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

設立 35 周年刊行物

maibun 35

kyoto-fu

maibun 35

取扱説明書

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用、そして、研究を行うため、昭和 56（1981）年に京都府により設立されました。

☺ その設立 35 周年を記念し、過去 1,250 件以上の発掘調査の成果の中から、選りすぐりのトッピックやエピソードを集めました。

☞ この『maibun35　kyoto-fu』は、上端と右側面、「時代」と「ジャンル」のアイコンから検索できるシステムを備えています。いわばスマホ仕立てのおもしろアーカイブ。お好きなアイコンをクリックして考古学の魅力に触れてください。

⚠ ながらスマホは、危険ですので、おやめください。

☑ アップした画像は、当調査研究センターの発掘調査によって出土した遺物です。ただし、その後、遺跡が所在する市町に保管替をした遺物については、所蔵機関を明記しました。

旧石器・縄文時代

きのう、ふと思ったんだけど、京都府にも旧石器時代の遺跡はあるの？

あるにはあるんだけど、ナイフに似た石器が出るぐらいで、村の跡まではみつかっていないんだ。

縄文時代の遺跡も、きっとないんだろうね！

ところが、丹後から南山城にかけて、たくさんの遺跡があることがわかってるんだなあ～！

へえ～‼？どんな生活をしてたの？

ドングリやけもの、魚なんかを食べ、舟でいろんなところに行って、お祭りをして・・・

今とあんまり変わらない生活をしてたんだね！

ただ、平均寿命は 30 歳！自ずと今とは違う人生観をもって生きていた。わかるかなあ～!!

30 歳 !? ずいぶん短いんだね。ところで、昔の人は、どんなモノをもっていたの？

このサイトに詳しい情報がのってるよ
http://www.tsuginope-jiwomekuttene.or.jp

よろしおすな

旧石器・縄文

山を越えロマンを秘めたサヌカイト

日本列島で人類の活動が確認されているのは、今から約三万八千年前ころからです。旧石器時代と呼ばれる時代で、人々が狩りのため移動生活をしていました。京都府内では多くの場合、本来の地層と異なる後の時代の地層中から散発的に見つかっています。

長岡京市でおこなわれた開田城ノ内遺跡の調査では新しい時代の遺構・遺物に混じって旧石器時代の国府型ナイフ形石器が出土しています。国府型ナイフ形石器は近畿・瀬戸内地域を中心に使われた石器です。ナイフ型石器とは縁辺に刃をつくるもので、槍先につけて狩猟に使ったと考えられています。京都府で見つかるナイフ形石器のほとんどは国府型ナイフ形石器で、奈良県と大阪府境にある二上山で採れるサヌカイトという、真っ黒なガラス質の石材が使われています。二上山のサヌカイトはその後も縄文・弥生時代を通じて使われ続けます。

むすぶ

ナイフ形石器（開田城ノ内遺跡）

ナイフ形石器

旧石器・縄文

ネガとポジの文様

今から約一万五千年前頃、最終氷期が終わり寒暖を繰り返しながら気候が温暖・湿潤化します。植物・動物相も大きく変わり、人々の生活にも変化が生じます。土器や石鏃の使用量が増え、定住性が高まるのが縄文時代早期です。縄文時代早期は今から一万一千年前～七〇〇〇年前頃です。西日本の早期を特徴づける土器に、押型文土器があります。短い棒状の工具に文様を刻み、それを回転させながら土器に押し当てると凸凹ができ、文様として現れます。亀岡市にある案察使遺跡第五次調査では縄文時代早期の土器（大川式）が出土しています。土器の表面には横に広い凹んだ楕円形が連続して刻まれています。同じく亀岡市の蔵垣内遺跡第一一次調査では、案察使遺跡よりも新しい土器（高山寺式）が出土しています。こちらは逆に、楕円や格子目の浮かび上がるような文様をもっています。時期によって土器の文様が少しずつ変わる様子がわかります。

むすぶ

押型文土器（案察使遺跡第五次、蔵垣内遺跡第一一次）

押型文土器

上の黒い土器が案察使遺跡出土。下は蔵垣内遺跡出土。

旧石器・縄文

縄文の海人

日本海に面した舞鶴湾の湾口にある浦入遺跡から、縄文時代の丸木舟が見つかりました。今から、およそ五〇〇〇年前の舟と考えられます。舟は長さ五m分が残っていました。舟の幅は一mです。縄文時代の丸木舟は八〇例ほど見つかっていますが、それらと比べても、幅の広い舟と言えます。舟の厚さは七～九cmです。舟の内側には焦げ痕が残っています。半割りした巨大な杉の丸太の上で火を焚き、焦げた部分を石の斧などを使って削りながら作ったものとみられます。手間と時間がかかったことでしょう。

浦入遺跡からは、北陸の特色をもつ縄文土器や山陰産の黒曜石、琥珀製の玉など、地元産でないものが見つかっています。縄文人には、狩や漁などで生活していたイメージがあります。見つかった舟や他の地方産の遺物からは、漁だけでなく、海路を利用して交流していた、たくましい縄文の海人の姿が見えてくるようです。

むすぶ

丸木舟（浦入遺跡）

浦入遺跡の丸木舟（舞鶴市教育委員会所蔵）

旧石器・縄文

縄文グルメ

土器の登場により煮炊き調理が容易になり、植物食が発達したのが縄文時代の特徴の一つです。カロリーベースでは、動物よりもむしろドングリなどの堅果類を含む植物を食料として中心的に利用していたことが判明しています。堅果類の調理には殻を割ったり粉に砕いたりする敲石・磨石という道具が使われており、長岡京市の友岡遺跡・伊賀寺遺跡でも出土しています。

もちろん縄文人がドングリばかりを食べていたわけではなく、周辺の食材を季節に応じて上手に利用していました。京丹後市の松ケ崎遺跡では縄文時代前期を中心とした植物・動物遺体が出土しています。植物遺体はイモ・エゴマ・サンショウ・トチノ実などが確認されています。動物遺体ではマダイ・ヒラメ・スズキなどの魚類に加え、ニホンザル・シカ・タヌキ・鳥類の骨が出土しています。こうした遺物は本来残りにくいのですが、低湿地にある遺跡のため残存していました。

ツール

石器（友岡遺跡・伊賀寺遺跡）

友岡遺跡・伊賀寺遺跡の石器

（手前２点：磨製石斧、その他：敲石・磨石）

旧石器・縄文

ねがい・かなえ・たまえ

縄文時代の土偶はユーモラスな姿・表情で博物館の展示などでも特に人気のある遺物ですが、京都府内では数点しか見つかっていません。福知山市の三河宮ノ下遺跡の土偶は、巧みに眉、鼻、目、口を表現しています。この土偶は胴体の部分がありません。一般的に土偶は女性を表現していて、破損した状態で出土する場合が多いという特徴があります。祭祀で土偶を壊すことに意味があると考えられています。

友岡遺跡・伊賀寺遺跡から出土した石冠も、祈りの道具の可能性がある遺物です。祭祀に使われていたとする考えと、斧のように使っていたという説があります。全体がていねいに磨かれていて、頭部は斧状を呈します。周囲には線刻がめぐっていて、底面はレンズ状に凹んでいます。重さは三〇五ｇです。石冠は本来、縄文晩期の飛騨を中心とした中部地方に多く見られるものです。東日本との交流をうかがわせる遺物です。

いのり

土偶（三河宮ノ下遺跡）・石冠（友岡遺跡・伊賀寺遺跡）

土偶（京都府立丹後郷土資料館所蔵）

石冠

旧石器・縄文

安産と子育てのシンボル

京田辺市にある薪遺跡第七次調査では縄文時代の石棒が見つかりました。石棒は男性の性器をかたどった棒状の石器で、豊穣などを願う祭りに使われたと考えられています。薪遺跡の石棒は縄文時代中期末～後期前葉のもので、安山岩製です。下の方が欠損していますが本来は一m近くあったと見られます。重さは一四・六kgもあります。

縄文時代後期以降、石棒は片手で持てるサイズに小型化します。石材も和歌山県北部や徳島県産の結晶片岩という石材が使われます。福知山市の岡ノ遺跡第二次調査では小型の石棒と見られるものが出土しています。八幡市の木津川河床遺跡第二一次調査では棒状の結晶片岩の石材が出土しています。石棒を作るために石材が持ち込まれた可能性があります。綾部市にある葛禮本神社境内には、薪遺跡と同時期の全長九五・三cm、重さ五七・五kgを測る石棒が現在も祀られていて、安産子育ての神様として信仰を集めています。

石棒（薪遺跡第七次）

いのり

石棒

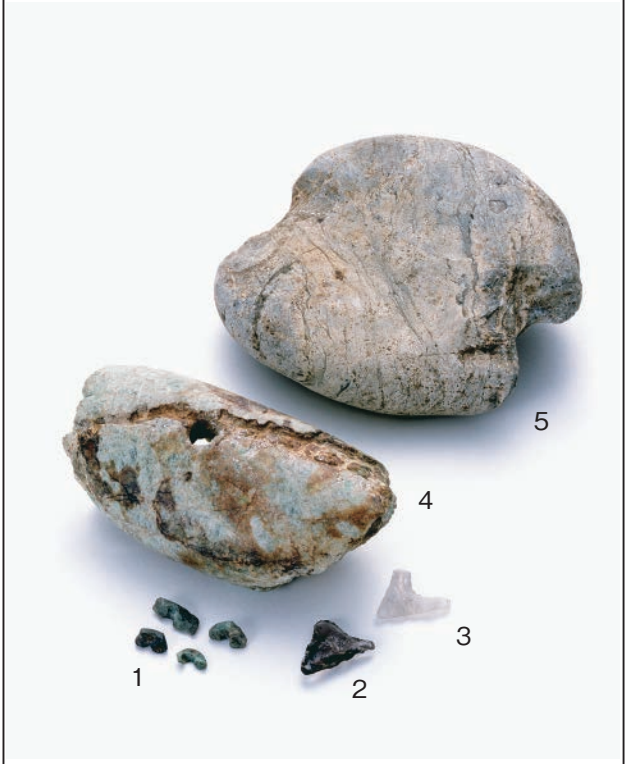
旧石器・縄文

適材適所

府内の縄文遺跡では、打製石器にサヌカイトが用いられることが多いのですが、それ以外にも様々な石材が使われていました。1は長岡京市にある伊賀寺遺跡で出土した玉です。小さな石に穴を開け、首や腕に着けていたと考えられます。石材には、兵庫県北部や福井県北部の碧玉が使われたと考えられています。2は福知山市仲ノ段遺跡で出土した石鏃です。長野県の黒曜石というガラス質の石材が使われています。3は亀岡市の室橋遺跡第一一次調査で出土した石鏃です。縄文時代前期のものと見られ、瑪瑙が使われています。4は精華町の椋ノ木遺跡で出土した翡翠製と見られる大珠（おおだま）です。5は仲ノ段遺跡で出土した石錘です。石材は蛇紋岩の可能性が指摘されています。

むすぶ

玉（伊賀寺遺跡）、石鏃・石錘（仲ノ段遺跡）、石鏃（室橋遺跡）、大珠（椋ノ木遺跡）


5
4
3
1
2

弥生時代

お米作りが大陸から入ってきて、生活が一変したって書いてあったけど、どう変わったの？

水田を営むために定住して、鉄の道具を使うようになって、海の向こうから戦争もやってきて・・・

おまけに、お米のたくわえの違いで、上下関係ができて、首長のお墓が出現したんだ！

へえー！縄文時代とずいぶん違うんだね。ほかにどんなものが入ってきたの？

お米作りにかかわるお祭りや道具も入ってきたんだ。

僕たちが住んでいる京都にも、お米作りの村はあったんだろうけど、ほかに何かつくってたの？

そうだね～。丹後では、水晶を使った装身具の生産を行っていたことがわかってるよ！

おまけに、全国的に見てもガラス製品や鉄器がよく出てくることで知られているんだ。

特に丹後では、鉄器の生産も行われていたらしいね。

そうなんだ。弥生版コンビナートが丹後にはあったんだ!!

よろしおすな

弥生

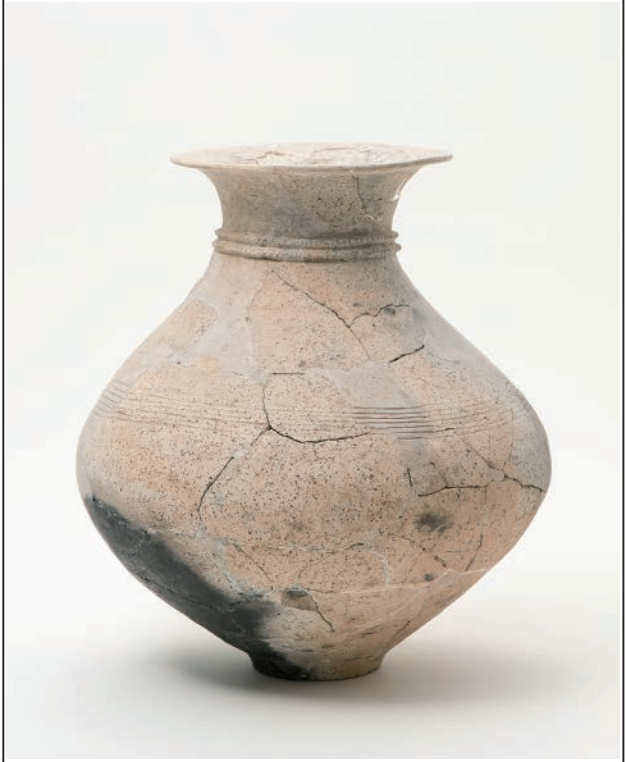
種もみが中に入ってます

弥生時代のはじまりをこの赤焼きの土器が教えてくれます。京都盆地での米作りは、今からおよそ二五〇〇年ほど前、北部九州から瀬戸内海経由でもたらされました。おそらく種もみが入っていただろうこの土器とともに始まります。同じころ、日本海経由でも同じ形の壺とともに米作りは丹後半島にもたらされます。これらの壺の底にはときどき種もみの圧痕が残されています。

縄文時代の土器は、煮炊きをする深鉢と食べ物などを盛る浅鉢の２種類の器でした。一方、米作りとともに使われた弥生土器には、種もみや水などを入れるための壺、米などを煮炊きする甕、食べ物などを盛る鉢、高杯の４つの種類の器からなり、生活の様子が変わってきたことがわかります。

むすぶ

弥生土器　壺（雲宮遺跡）



弥生土器（壺）

弥生

ウルトラマン登場！

米作りが伝わると人々は環濠集落と呼ばれる大溝に囲まれたムラに住むようになります。丹後半島の付け根付近、与謝野町温江遺跡の発掘調査では、環濠内から弥生時代中期前葉の土器とともに、人面（顔の長さ九・一五㎝）を持つ土器が出土しました。

一見ウルトラマンのようでもあり、キューピーのようでもある人面は立体的・写実的に、人の顔を表現しています。頭には髷状の突起があり、両耳には小さな穴が開けられ、後頭部には櫛歯状の隆起がありますが、どのような装身具が付いていたかはわかりません。

同様の人面土器は、松江市西川津遺跡でも出土しており、日本海側沿いではしょうゆ顔の人々が弥生文化を伝えたのかもしれません。一方、瀬戸内海側のさぬき市鴨部・川田遺跡と総社市田益田中遺跡からは入墨をした頭に突起をもつ人面土器が出土しています。

人面付き土器（温江遺跡）

いのり

人面付き土器（与謝野町教育委員会所蔵）

弥生

豊穣を祈る

弥生人が神に祈りを捧げ作物の豊穣を祈った道具として、青銅製の銅鐸が良く知られています。残念ながら京都府内からは七か所の出土地が知られるものの、発掘調査では、見つかったことはありません。

一方、土で造られた小道具が幾つか知られています。銅鐸を模倣した銅鐸形土製品は、全国から百点近く、府内からは十三点が出土しています。長岡京市硲遺跡の資料は、舌を伴い銅鐸同様音を鳴らして神を呼んだものと考えられます。福知山市観音寺遺跡では銅鐸形土製品とともに蝉を模った土製品が出土しています。中国では古来、死者に蝉形の玉をくわえさせ死者の再生を願う風習があったとされています。綾部市興・観音寺遺跡からは広島県を中心に分布する分銅形土製品が出土しています。分銅形土製品は壊された状況で出土することが多く、当例も頭部を欠いています。弥生人はこれらの道具をどのように使い、神と交信しようとしたのでしょうか。

いのり

銅鐸形土製品（硲遺跡、観音寺遺跡、興・観音寺遺跡）

上：銅鐸形土製品、右下：蝉形土製品

左下：分銅形土製品（福知山市教育委員会所蔵）

弥生

原材料、入手困難につき・・・

むすぶ

銅剣形石剣（志高遺跡）

いつの時代も光輝くものに人々は畏怖の念と憧れを持ちます。それが武器である場合はなおさらで、最近は日本刀を好む女子が多いとか。

舞鶴市志高遺跡からは、住居の床下に上半部を欠いた銅剣形石剣が隠されていました。銅剣は銅鐸とともに弥生時代の祭祀具の一つですが、北部九州と生産地は遠く、近畿の人々は、石の代用品で賄ったようで、集落遺跡からはたびたび、破砕された状況で出土しています。

石剣は中細型銅剣を模したもので、粘板岩と呼ばれる黒い石を磨いて作っています。中細型銅剣は九州・中国地域で多く発見され、祭祀の道具と考えられています。

出土遺物を見ると、細部も精密に真似ていることから、実際に中細型銅剣を見た人が作ったと考えられます。堅い石を磨いてでも銅剣が欲しかったと考えられます。

銅剣形石剣（舞鶴市教育委員会所蔵）

弥生

技術を磨く・弥生人の四苦八苦

人目を避けるように平野から奥に入った丘陵部に碧玉などの緑色の石をを原材料とした玉作工房が営まれたのは中期の中頃でした（京丹後市弥栄町奈具岡遺跡）。工具には、原石を分割する結晶片岩の石鋸や孔を開ける直径一㎜ほどの瑪瑙製の石針が用いられました。やがて工房には、孔を開ける鉄針などを製作するための多量の鉄素材が持ち込まれ、小鍛冶による鉄の再加工を始めた様子もうかがえます。終わり頃になると水晶を原材料とする玉作りが開始されます。次に目指したのは、大陸からもたらされたガラス小玉の再加工であったようです。ガラスを小さく割り、加熱し玉をつくろうとしたようです。良く見ると、溶かすことはあきらめたのか、半裁して横方向に孔を開けようとした痕跡も認められます。最新技術を身につけ新しい道具を作り続けた勤勉な弥生人の姿が認められます。

むすぶ

ガラスと水晶（奈具岡遺跡）

水晶製玉類の原石から製品まで

弥生

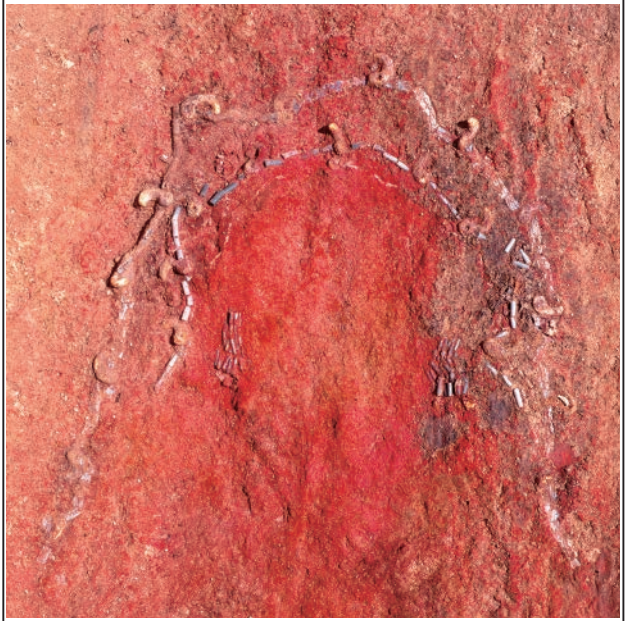
丹後はガラスの宝庫

弥生人は、青や緑色の宝石を好んだようで、翡翠・碧玉・緑色凝灰岩などが最初に用いられました。海外からガラスが持ち込まれると、人々はこぞってガラスに魅了されます。全国で弥生時代のガラス製品は五万点以上出土していますが、近畿北部は、北部九州に次いで出土量が多いのです。

後期初頭の京丹後市三坂神社墳墓群では、中心埋葬施設からガラス管玉の頭飾りと、ガラス勾玉・小玉・水晶製小玉からなる装身具が見つかりました。墳墓群全域で胸飾り・腕飾りなどに用いられた三千点ほどのガラス製品が出土しています。後期後半の与謝野町大風呂南墳墓や京丹後市比丘尼屋敷墳墓からは、ガラスの腕輪が出土しています。後期末の京丹後市赤坂今井墳墓から見つかった頭飾りには、ガラスの勾玉・管玉・碧玉の管玉など三百以上の宝石が用いられていました。これらのガラス製品は、中国や東南アジアの地域からもたらされたものと、それらを原料に丹後で再加工されたものです。

むすぶ

ガラスを用いた頭飾り
（赤坂今井墳墓）



ガラス製品を用いた頭飾り

古 墳 時 代

弥生時代の首長は、古墳時代になって、どう変わっていったの？

古墳時代になると、上に立つ人は、次第に力を強めて、ついに「王」になったんだ！
「王」は自分の力を示すために豪華な宝物で身を飾り、死ぬと宝物とともに、大きなお墓に手厚く葬られたんだ。

「王」はどんなお墓に葬られたの？

前方後円墳や円墳、そして方墳などに葬られたんだけど、時代や階層によって、大きさや形もさまざまなんだ。

「王」はどんなものを持っていたの？

日本でずっと使われていたものだけじゃなくて、大陸に起源をもつものも持っていたんだ。

大陸に起源をもつ〜!? どんなものがあるの？

調度品やお祭りの道具、そして、装身具などがあるよ。

よろしおすな

古墳

調度品としての「案」

住居などの床面は人間が日常的に接していることから、古来、神に捧げる供物を床に置くことは避けなければなりませんでした。そのため、脚が付いた食器である高杯が宗教的儀礼で多用されました。中国で高杯は、「豆」と書かれます。この漢字は「一」と「豆」に分解できますが、「一」は蓋、「豆」が脚と杯部を表していることがわかります。

京丹後市古殿遺跡から、「案」とよばれる木製の机が出土しました。天板と三本の脚がバラバラで見つかりましたが、本来は四本脚のものです。ちょうど、料亭や旅館で使われるお膳くらいの大きさです。

案は高杯などを複数で使用する時に、食器などが地面に接しないように使われていたものと考えられています。案は、朝鮮半島の壁画にも描かれており、先に述べた高杯と同じく、広く東アジア社会の中に浸透した調度品であることがわかります。

むすぶ

案（古殿遺跡）

案

古墳

邪悪な者、近寄るな！

古墳は、有力者が静かに眠る奥津城です。古墳の周囲に掘られた大きな濠は、邪悪なものが侵入できないようにしたものです。幾重にも巡らせた埴輪の列も同様の意味をもちます。

亀岡市時塚一号墳は一辺約二五ｍの古墳時代中期（五世紀末）の方墳です。墳丘の周りに壕があり、その底からは埴輪が多数出土しました。

本来は墳丘に立てていたものが転落したのでしょう。割れた埴輪片を復元すると、盾と人間が合体したような、風変わりな埴輪となりました。盾の上半部には目が切り込まれており、本来は鼻もあったようです。邪悪な侵入者の足音を聞き逃すまいと、耳の形は鋭く削り出されています。眼の周囲には、入墨か隈取りと思われる表現があり、眼光鋭い印象を受けます。古墳へ侵入しようとする邪悪なものを厳しく睨みつけ、その侵入を防いでいるようです。

盾持ち人形埴輪（時塚一号墳）

いのり

盾持ち人形埴輪

古墳

ぐにゃぐにゃの剣

綾部市奥大石二号墳と南丹市城谷口二号墳から、「ぐにゃり」と曲がった剣が見つかりました。蛇行剣です。文字通り剣身が曲がった特徴から命名された剣です。中国の古い書物に記されている「雨師妾」は雨を司る神ですが、両手に黒い蛇、両耳に青と赤の蛇を携えています。蛇を模した蛇行剣も、司祭的な性格があると考えられます。

蛇行剣が本州で出土する五世紀は、農耕司祭的な首長者から武人的な首長へと変貌する時期に当たります。畿内の中核地での首長は、いち早く武人化する必要に迫られました。しかし地方の小規模古墳の首長は、司祭者的性格が依然として強かったと考えられます。奥大石二号墳と城谷口二号墳も小規模な古墳であり、これに該当します。

蛇行剣の奇妙な剣身には、司祭者の性格を強く印象づける目的があり、首長がもつべき象徴だったのです。

蛇行剣
（奥大石二号墳・城谷口二号墳）

いのり

城谷口２号墳
（南丹市教育委員会所蔵）

奥大石２号墳
（綾部市教育委員会所蔵）

古墳

神聖な水辺の「まつり」

水は、日常生活や神聖な「まつり」に必要であり、谷川から流れ出る清水を確保するために全国的に共通する形の導水施設が見つかっています。

京丹後市浅後谷南遺跡では、幅二mの流路内に全長三・五m、引き込んだ水の上澄みだけを流す幅三〇cmの樋とその水を溜める幅六〇cm、長さ一一〇cmの漕が一体化した杉材で作られた導水施設が見つかりました。周辺からは、「まつり」に使用された舟形や鳥形、円盤状の木製品とともに壺や高杯などの土器も見つかっています。

奈良県御所市南郷大東遺跡では、大型建物の近くで導水施設が見つかっており、また、古墳の墳丘に置かれた家形埴輪にも、同じような形状をした導水施設の土製品をもつ埴輪が確認されています。

浅後谷南遺跡でも周辺にまつり場が存在するのではないかと考えられています。

いのり

導水施設（浅後谷南遺跡）

導水施設

古墳

こう見えて龍です

古墳時代中期以降に中国などからもたらされたものに金工の技術があります。当時の有力者は黄金に輝く装飾品を権威の象徴として好んで用いました。

京丹後市高山一二号墳からは銅に金メッキした、「双龍環頭大刀」二点が出土しました。七世紀ころのものです。柄の部分には、口に不老不死の薬である「仙薬」をくわえた、向かい合う二匹の龍の姿があるのですが・・・そう見えますか？

このデザインは、魂の不死を願う中国の神仙思想が深く関係しています。当初は、写実的な龍の形だったのですが、日本で長い間製作されるうちに簡素化した結果、こうなったのです。本来の意味が日本で理解されなかったという理由もあるようです。当センターのロゴは、この文様と「京」の文字を組み合わせたものです。変遷しつつも受け継がれる人間の想いとデザインが、私達のシンボルマークです。

環頭大刀（高山一二号墳）

いのり

金銅装双龍環頭大刀柄頭（こんどうそうそうりゅうかんとうたちつかがしら）

（京丹後市教育委員会所蔵）

古墳

神をまねく

鐸とはベルのような鐘のことです。弥生時代の銅鐸は良く知られていますが、鉄製の「鉄鐸」と呼ばれるものも存在しています。激しく振ることによって生じる金属音で、農耕神などを招来する儀式が行われていたと考えられています。

南丹市城谷口二号墳は、古墳時代後期（六世紀後半）の円墳です。数多くの副葬品とともに、高さ約五cmの鉄鐸が出土しました。内部に吊るし、鐸を叩いて音を出す「舌」という金属棒も出土しました。

鉄鐸は朝鮮半島の南部でも出土する鉄器です。城谷口二号墳からは、同じく朝鮮半島との関連が伺われる「蛇行剣」も出土しています。

この古墳の被葬者は、朝鮮半島に起源をもつ「まつり」を取り入れ、広い地域との交流を司っていたのではないかと考えられます。

鉄鐸（城谷口二号墳）

いのり

鉄鐸

（南丹市教育委員会所蔵）

古墳

金色に輝く耳飾り

中国や朝鮮半島の装身具には、純金でつくられた正に貴金属と言っていい副葬品があります。

一方、日本では純金製品が多くないのが特徴です。その代わりと言っては何ですが、銅製品に鍍金（ときん）をした耳飾りなどが多く出土しています。鍍金とは、金と水銀の合金を使ったメッキの方法です。

八幡市女谷（おんなだに）・荒坂（あらさか）横穴群は、現在八〇基の横穴墓が確認されており、多くの土器とともに鍍金された耳飾りが出土しています。

古墳や横穴墓から出土する鍍金された耳飾りは、地中に埋没している間に表面の銅がさびて、ほとんど鍍金した金が残らないことが多いのですが、ここから出土した耳飾りの多くは、鍍金された金がきれいに残っていました。

あまり、副葬品が出土しなかった横穴墓群ですが、金色に輝く耳飾りだけが光り輝いていました。

耳環（女谷・荒坂横穴群）

ツール

耳環

（八幡市教育委員会所蔵）

古墳

舶来旋風！

古代の日本においては、日本海側が交易の中心でした。中国や朝鮮半島との関係があったからです。こうした状況を反映して、京都府内では丹後半島で卓越した大型の前方後円墳が見られます。

京丹後市奈具岡北一号墳は、全長六〇mのの前方後円墳です。墓穴の上からは、「陶質土器」と呼ばれる土器が割れた状態で出土しました。意図的に土器を壊す儀式が行われたと見られます。写真の一番左前の大きな透かし孔をもつ高杯は、韓国の「金官伽耶」の特徴をもっています。こうなると、一見、奈具岡北一号墳の被葬者が半島と直接交易していたようにも見えます。しかし、一緒に出土した土器には、日本で焼成された初源期の須恵器も含まれています。日本の須恵器生産にはヤマト王権が深く関わっています。つまりこれらの土器は、朝鮮半島から直接もたらされたのではなく、ヤマト王権との関係で手にいれたものなのでしょう。

むすぶ

陶質土器（奈具岡北一号墳）

陶質土器

古　代

木津川市で、奈良時代のお寺が見つかったんだって？

馬場南遺跡（ばばみなみ）のことだね。奈良時代の中頃に建てられて、平安時代の初めには廃れたと言われているね。

へえ～、そんな短い期間でなくなったのか。

そんな昔に無くなったお寺だけど、墨書土器（ぼくしょ）から「神雄寺（かみおでら）」という名前のお寺だったことがわかったんだ。

それはスゴいねぇ。大昔に無くなったお寺の名前がわかるなんて。

そうだねえ。なかなか稀なことだねえ。このお寺からは、万葉集の歌が書かれた歌木簡や法事に使った三彩山水陶器（さんさいさんすいとうき）なんかも見つかっているよ。

短い期間だったけど、ずいぶん栄えていたことがわかるね。すごいな、考古学って！

そうだね。これからも、いろんなものが見つかるだろうね。幻の恭仁京が見つかる日もそう遠くないかもね。

よろしおすな

古代

オリジナル版「万葉歌」

「この木簡を見ずして万葉歌木簡を論じることはできません。」

木津川市に所在する馬場南遺跡で出土した「万葉歌木簡」について、当調査研究センター理事長の故上田正昭先生が記念講演でことさらに強調された一節です。

大伴家持により延暦二(七八三)年ごろに二〇巻にまとめられた日本最古の和歌集として知られる「万葉集」。そのオリジナルは現存していませんが、その校訂本が数種類伝わっています。

現在、木簡のかたちで土の中から出てきた「万葉歌」は、全国で三例しかありません。その中で、馬場南遺跡(史跡神雄寺跡)から出土した木簡は最も残りが良く、歌会の木簡としては唯一無二のものです。

木簡の下側が折れていますが、和歌の冒頭の文字がしっかりと書き込まれています。

万葉歌木簡(神雄寺跡)

ツール

阿支波支乃之多波毛美智□

（あきはぎのしたばもみち）

表

裏

万葉歌木簡

刊本の巻十に所収された二二〇五の作者未詳の和歌

「秋萩の　下葉もみちぬ　あらたまの　月の経ぬれば　風いたみかも」

の、まさに「ほんまもん」が千年余の時を経て、姿を現したといえます。

古代

お寺造りの苦悩と苦労

丹後国は、和銅六(七一三)年に丹波国から分国されて誕生します。京都府内には、数多くの古代寺院が建てられますが、京丹後市網野町にある俵野廃寺は、京都府内で最北に建てられた古代寺院です。

今までに、塔の心礎と思われる礎石とともに、寺院の軒先を飾る軒丸瓦や軒平瓦、そして屋根の棟の端を飾る鬼瓦などが出土しています。特に、軒丸瓦には、平城京などで使われているような都風の文様をもつ一群と、蓮の花を意匠したと考えられる一群があります。しかし、仏教における蓮の花の意味までは伝わらなかったのか、ひいき目に見ても「蓮の花」とは言いがたい文様になっています。

このように、苦労しながら地元の工人が造った軒丸瓦を見るにつけ、都から離れた土地での寺造りの苦悩と苦労が伝わってくる逸品です。

蓮華文軒丸瓦(俵野廃寺)

いのり

俵野廃寺の軒丸瓦

古代

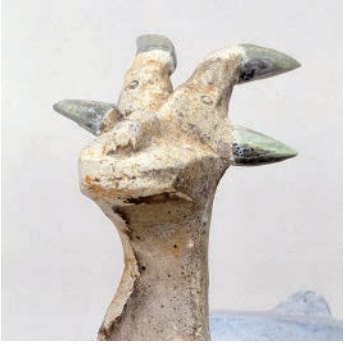
ヤギではありません

木津川市・精華町にまたがる樋ノ口遺跡は、一般の集落では見られない奈良時代の施釉陶器が二〇〇点に及んで出土したため、離宮あるいは寺と考えられています。

この遺跡から、動物の形をした陶器が出土しました。残念ながら、見つかったのは頭部だけで、耳と角の先端は欠損しています。目はヘラ先で突き刺した点で表現しています。一見、ヤギにも見えてしまいますが、平城京跡や三重県の斎宮跡では、硯に羊の頭部をつけた「羊硯」が出土しています。平城京跡や斎宮跡の例は当品よりも羊らしく見えるのが悔しいところですが、それらを参考に復元しました。中国で羊は霊獣として珍重されており、羊硯は高位の人が使ったと考えられます。この羊硯の表面には灰釉がうっすらとかかっています。奈良時代にはまだ灰釉陶器はなかったのですが、奈良三彩も多数出土しており、意図的に掛けた、原始的な灰釉陶器と考えられます。

灰釉龍（羊）形陶器（樋ノ口遺跡）

ツール



灰釉龍（羊）形陶器

古代

垣間見えた！山水の世界

彩釉山水陶器（神雄寺跡）

ツール

木津川市史跡神雄寺跡（馬場南遺跡）からは長さ一〇～二〇cmの陶片が五八点ほど出土しました。色とりどりの釉薬が掛けられており、奈良時代中期の三彩陶器とまではわかるのですが、用途は不明です。

第一のヒントは、うねるような立体的な表面。どうやら山や水の流れをヘラで表現しており、山は褐色、川は緑色、魚は深緑色と釉薬の色を分けています。もうひとつのヒントは、側面や裏面にヘラで刻まれた「右三」や「左五」という文字。それぞれを配置する位置を示していると見られます。

復元すると縦横に一五〇cmに広がった八葉の蓮弁になり、その中に山水の世界を立体的に表現していたことがわかりました。これが制作された頃は、漢詩集『懐風藻』に見られるように、吉野離宮やみかの原離宮の風景を愛でて山水の世界を歌った作品が多いので、この世界観が反映されたのでしょう。

彩釉山水陶器

拡大図

古代

辻を鎮め、地を鎮める

長岡京左京二条三坊一五町で確認された掘立柱建物跡では、南面中央の柱と柱の間に二彩の小壺を埋納した地鎮の穴が見つかっています。一方、長岡京東三坊大路と二条条間北小路の辻には、和同開珎・神功開寳・萬年通寳を納めた木の箱が埋められていました。

古来、道が交差する辻は、今と異界をつなぐ境界と考えられてきました。そのため、辻から悪しきものが「今」に入り込まないように日本古来の道祖神や中国起源の石敢當などの魔除けが祀られています。また、中国では、墳墓を築造する際、地神から戸地を占有することを許し願うため、買地券を墓室にすえる風習があったようです。

長岡京で見つかったこれらの穴は、それぞれ異なった意味合いを持つ、鎮めの穴なのです。

二彩小壺（長岡京跡）

いのり

二彩小壶

古代

癒しの相乗効果

木津川市史跡神雄寺跡（馬場南遺跡）では、香炉・壺・小壺・杯・蓋などのほか極めて珍しい塔鋺など五四点の施釉陶器が出土しました。釉薬でカラフルに彩った奈良時代の陶器を三彩と言い、本例のように日本で製作されたものを「奈良三彩」と言います。

とくに、火舎型香炉は足の裏にも動物の肉球を表現するなど精巧なもので す。香炉と壺は香を焚き、両側に花を生けた壺を置くという、仏教儀式での使い方を想像できる組み合わせです。仏教の祈りとは別に、香の香りと動物の肉球に癒されていたのでしょうか。

神雄寺跡では灯明を灯し、聖武天皇の病気平癒を願った供養の跡が見つかっています。その際にも三彩陶器が多く使われていたようです。

灯明のあかりに照らされた三彩陶器はよりいっそう荘厳さを増したことでしょう。

三彩陶器（神雄寺跡）

ツール

三彩陶器

古代

調度品としての「唾壺」

昭和四〇年頃、役場に行くとホーロー製の白い蓋付きのバケツ風の唾壺が置いてあったのを強烈に記憶しています。

長岡宮西方官衙地区では、平安時代の緑釉唾壺が出土しました。唾壺は、中国を起源とします。中国は大陸性気候であり、乾燥が激しく唾を吐き出しますが、日本は湿潤な気候であり、唾を出す必要がなかったのではないかと思われます。仮に唾を吐くとしても、礼儀として懐紙などを使用していたとも考えられます。『類聚雑要抄』には、唾壺が調度品として記載されており、京都御所にも銀製品の唾壺が見られます。

これらの唾壺は、実際に使用したものではなく、部屋を飾り立てるための道具立てであったと考えられます。都で出土する緑釉陶器の全てが調度品だとは言えませんが、今後少し見直す必要があるようです。

緑釉唾壺（長岡宮跡）

ツール

緑釉唾壺

寺院へのあこがれ

飛鳥・奈良時代は仏教が日本で開花した時期で、各地域で競って寺院を建築していました。寺院には釈迦の骨を納めた塔、仏像を安置した金堂、僧侶の講義の場である講堂などが配置されています。寺院は国家が主導し、国が直接かかわった寺院のほか、各氏族が氏寺として造営しますが、寺院を造営するには多大な財力を必要とし、だれもが寺院を造営できたとは限りません。そのため、塔や金堂をかたどった土製の塔・金堂が奈良から平安時代に数多く作られました。

瓦塔は、塔を表した土製品で、木津川市瀬後谷瓦窯跡から奈良時代の瓦や須恵器とともに出土しました。ばらばらの状態で出土しましたが、その一部が復元できたものです。塔の最上部を飾る相輪や、屋根瓦を表した波板紋様、そして縁先の手すりなどが表現されています。表面には鉛を含む釉薬が施されていたようです。

瓦塔（瀬後谷瓦窯跡）

瓦塔（がとう）

（木津川市教育委員会所蔵）

古代

仏具も進化する

八幡市にある美濃山廃寺の発掘調査では、他では見られない不思議な形をした土製品が見つかりました。

ひさご形土製品は、その名のとおり三連のひょうたん形で先端部に宝珠、基部には孔があります。塔の最上部である相輪の先端部をかたどったものと見られ、木製などの小型の塔と組み合わせていた可能性があります。

覆鉢形土製品は半球形で底部に突帯がめぐってます。裏からは、貫通しませんが、孔があけられています。こちらは相輪の覆鉢をかたどったものとみられます。これらは一緒に出土した土器の年代から八世紀前半のものとみられ、小型の塔を用いた仏教儀式に使われていたと考えられます。

八世紀後半には藤原仲麻呂の乱後の平安を願うため、称徳天皇の発願で百万塔が造られていますが、美濃山廃寺の土製品はそれ以前に小型の塔を使った仏教儀式が存在したことが分かる貴重な例です。

いのり

ひさご形土製品・覆鉢形土製品
（美濃山廃寺跡）

ひさご形土製品

覆鉢形土製品

古代

たかが陶片されど陶枕

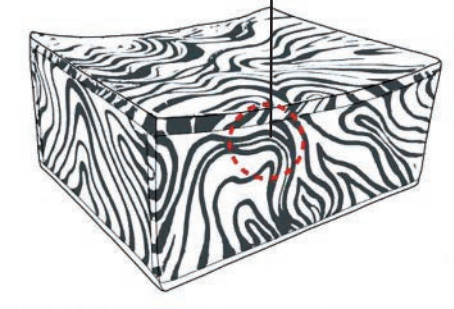
八幡市の内里八丁遺跡から出土した絞胎陶枕は、中国で唐の時代に生産された軟質鉛釉陶器の枕で、唐三彩の一種です。白色と赤褐色の粘土を練り合わせてマーブル模様の粘土の塊を作り、それを板状に切り出し、箱形に貼り合わせて作ります。七世紀中頃から八世紀中頃にかけて生産されました。

この絞胎陶枕は、三cm四方にも満たない小破片です。外面には黄色味を帯びた透明な釉が掛けられています。粘土板を貼り合わせた痕も見られます。このような陶枕は、頭をのせる枕ではなく、字を書く時に腕を支える道具という説もあります。

中国唐代の陶器は、一般的な集落跡からはあまり出土せず、役所や寺の跡などから出土しています。内里八丁遺跡に隣接する上奈良遺跡は、宮廷の農場である「奈良園」の候補地です。付近に園を管理する役所があったのかもしれません。

むすぶ

絞胎陶枕（内里八丁遺跡）



絞胎陶枕

古代

平安時代のコピー＆ペースト

八幡市女谷・荒坂横穴群は六世紀後半～七世紀前半に造られた墓ですが、同時に九世紀頃の墓も見つかりました。横着をしたのかは不明ですが、古墳時代～奈良時代に墓として掘られた空間を、平安時代の人がやはり墓として利用していたのです。この再利用された墓には銅鏡が副葬されていました。

鏡の図像は、上に吉兆をつげる雲である「瑞雲」。左右には翼を広げて向かい合う鳥、「双鸞」。下には雲に留まる鳥が表現されます。周縁は八弁の花形をしていて、めでたいもの尽くし。姿を写す鏡面には紙が付着していました。

この鏡は、中国の唐からもたらされた鏡に粘土などを押し付けて型をとり、日本で鋳造したものです。このコピー作業を踏み返しと言います。コピーのコピーで造られたようで、唐の鏡よりも文様がぼやけ、大きさも小さくなってしまっています。コンピューター社会の現在でも、どこかで聞いたことのあるような気がする話です。

瑞雲双鸞八花鏡
（女谷・荒坂横穴群）

いのり

ずいうんそうらんはっかきょう
瑞雲双鸞八花鏡

今の京都府庁の場所には、平安時代に、西洞院大路という幅24mの南北道路が通ってたんだ。それが、だんだん宅地化して道幅が狭くなることが分かっているよ。

どうして宅地が増えていったの？

中世の上京は、商売を営む豊かな町衆が住んでいたんだ。戦国時代には、町を守るための大きな堀を掘って自衛してたんだ。

へえ～、そうなんだ。

秀吉が聚楽第を造った頃には、大名屋敷があったんだよね。屋敷の屋根を飾った金箔瓦が見つかっているよ。江戸時代の初め頃には豪商が住んでいたようだね。茶道具の高級な焼物なんかが見つかるよ。

それは豪華だねぇ。

幕末には、京都守護職の松平容保（かたもり）の会津藩上屋敷があったんだ。新選組も来たかもしれないね。

よろしおすな

中近世

ほんまやったら重文なんやけど

むすぶ

越州窯青磁水注（平安京跡）

この青磁の水注は、中国南部（現在の浙江省）の越州窯の製品で、一〇〜一一世紀頃のものと見られます。日宋貿易などで日本にもたらされたのでしょう。水注が出土した場所は、平安京の条坊では左京四条一坊六・一一町、壬生大路にあたります。平安時代後期には、白河法皇の近臣で内蔵頭の藤原国明の邸宅があった所で、旧市電の壬生車庫跡地に中京警察署が建設されるのに先立ち調査しました。水注の下半部は失われていて、本来あったと見られる帯状の把手は石膏で復元しました。一二世紀には付近で大火があり、邸宅が一部焼けたとも考えられます。釉はくすんでいるので、その時に火を被ったのかもしれません。

よく似た越州窯青磁の水注は、藤原摂関家に関わる寺院である宇治市木幡浄妙寺跡でも出土しています。京都国立博物館に所蔵される重要文化財で、もちろん完形品。こっちもほんまやったらなぁ・・・

越州窯青磁水注　（残存高 10.8cm）

中近世

だれの腰刀

久御山町佐山遺跡では、一一～一三世紀頃の在地領主のものと考えられる一町四方の居館が見つかりました。居館を方形に囲む堀の中からは、腰刀が鞘と柄を装着した状態で出土しました。

刀身は錆付いており、銘などの有無はわかりません。白木でつくった柄と鞘は、糸を巻いた上から全面に黒漆を塗って規則的に凸凹しています。これは実用的には強化と滑り止め、装飾としても外見にアクセントを与えています。柄の元は丸味をもっており、柄の端が鞘に収まる呑口式の腰刀であることを示しています。鞘の差表には紐（下緒）を通すための金具（栗形）があり、差裏には（小柄櫃）が作られています。

この腰刀は簡素な拵えで、実用品と見られます。実用品ゆえに、かえってあまり残っていない資料です。

黒漆腰刀（佐山遺跡）

ツール

黒漆腰刀

（久御山町教育委員会所蔵）

中近世

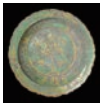
砂に守られた器

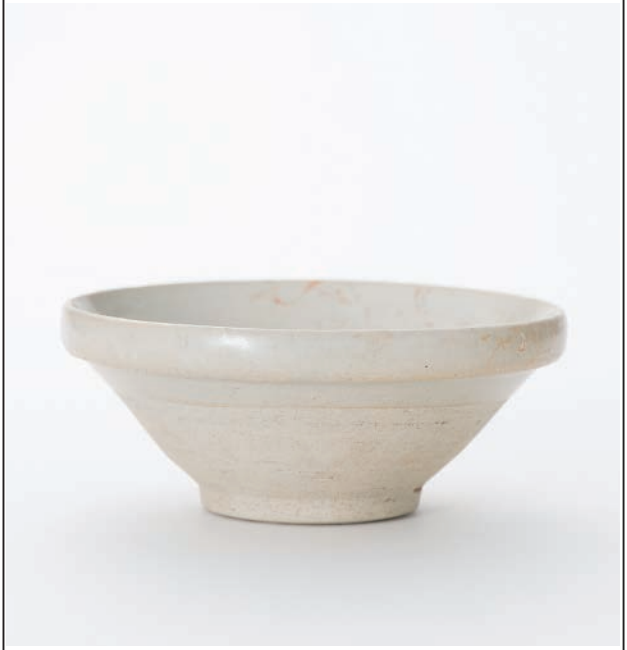
木津川は昔から氾濫を繰り返しており、付近の発掘調査でも洪水の痕跡が見つかります。水の流れがもたらした砂の層は非常に崩れやすく、発掘調査では調査員泣かせの存在です。

木津川左岸にある京田辺市門田遺跡では約二〇cmの砂層の中から、平安時代後期（一二世紀末～一三世紀初頭頃）の中国製の白磁椀が出土しました。口縁端部が厚いのが特徴的で、見込みには茶溜りがあります。外面の下半分は釉薬がかかっておらず、製作の際に削った様子がよくわかります。このような白磁椀は、日宋貿易などでかなり多量に輸入されたようで、多くの遺跡から出土していますが、ほとんどは割れた破片の状態で出土します。

このように完全な形で出土することは非常に稀で、京都府内でも数点を数えるのみです。発掘調査では悩みのタネである、洪水がつくった砂の層に遺物が守られたのです。

中国製白磁椀（門田遺跡）


うつわ



中国製白磁椀

中近世

五六億七千万年後への望み

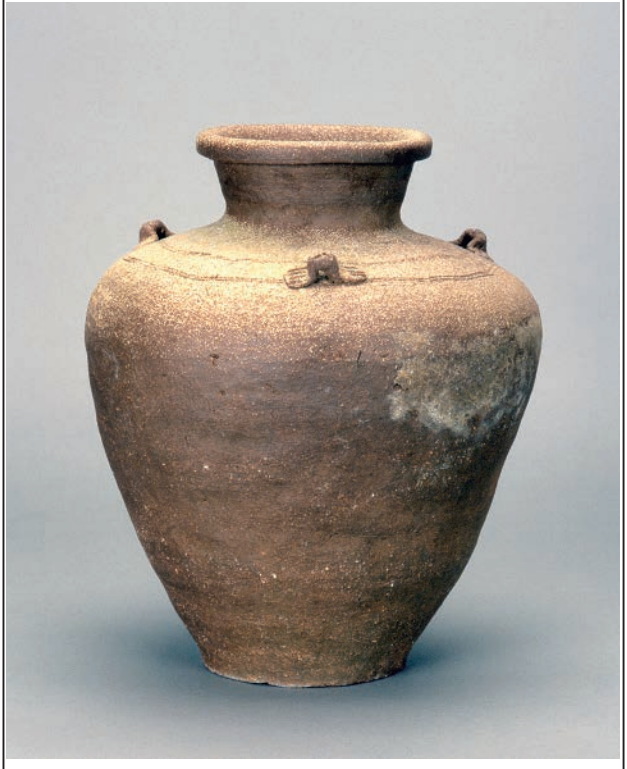
仏法が廃れる末法の世は、日本では永承七（一〇五二）年に始まると考えられていました。しかし釈迦の死から五六億七千万年後には、弥勒仏がこの世に下生し再度仏法を説くとされ、その時まで経典などを伝えるため、経塚が盛んに作られました。

与謝野町エノク経塚では、経筒として、越前焼の壺が使われていました。一三世紀頃のものと考えられます。経塚には、経筒に納めた経典と共に、陶磁器などが埋められます。エノク経塚では日本でつくられた鏡である「和鏡」や宋からの輸入銭、土師器の皿や須恵器が入れられていました。

経塚に納められた器の中の経典は、長い年月の間に朽ちてしまったのか、残っていませんでした。しかし、弥勒仏の下生を待ち望む思いは、朽ち果てることなく、器の中に籠り続けているのかもしれません。

越前焼壺（エノク経塚）

いのり



越前烧壶

中近世

宋から来た器

八幡市の内里八丁遺跡では中世の墓と見られる楕円形の穴が見つかりました。墓には副葬品として瓦器・土師皿・短刀などと共に青磁椀が出土しました。一二世紀～一三世紀初頭頃のものです。

椀というにはやや大き目で、内面には櫛状のもので描かれた「W」字が五つあります。本来なら素地に文様を彫り込んで「劃花文」と呼ばれる草花が描かれるのですが、この椀にはありません。省略されたのでしょうか。外面には、放射状の櫛描き文が施されています。このような櫛描き文は、中国南部、現在の福建省にある同安窯の製品の特徴です。同安窯の青磁器は平清盛が始めた日宋貿易などで日本に輸入されたのかもしれません。よほど愛用されたのか、よく見ると口縁部には、小さい欠けがいくつか見受けられます。

このような青磁椀は室町時代後期の茶人、村田珠光好みの茶椀で「珠光青磁」と呼ばれます。唐物ではありますが、枯れた感があります。

むすぶ

同安窯青磁椀（内里八丁遺跡）

同安窯青磁椀

中近世

お寺の水甕？

左京区にある京都府立図書館は、弥生～古墳時代の遺跡である岡崎遺跡と、成勝寺跡にあたります。成勝寺は平安時代末の院政期、白河の地に建てられた六勝寺のひとつで、崇徳天皇の発願と言われています。

ここでの発掘調査では、木製の板を四角に組んだ井戸が見つかりました。井戸の中には、高さが八〇cmを超える常滑焼の大甕が埋まっていました。一三世紀前半頃のものと考えられます。常滑は愛知県知多半島にある焼き物の生産地です。越前・信楽・丹波といった生産地にも影響を及ぼしており、中世においては一大生産地でした。

成勝寺は史料が少なく、廃絶時期がはっきりしていませんが、一三世紀前半には、まだ寺があった可能性があります。大甕は井戸からくみ上げた水を貯めておくため、井戸のそばに置かれ、水甕として寺で使う水をまかなっていたのかもしれません。

常滑焼大甕（成勝寺跡）

うつわ

常滑焼大甕

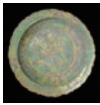
中近世

中世丹後の栄華

日本三景天橋立の北側にある宮津市難波野遺跡では、漆によって絵が描かれた漆器が良好な状態で多数出土しました。遺跡は、伏流水に恵まれた扇状地に位置しているため、土の中では残りにくい木製品が保存されていたのでしょう。漆器には椀・皿・鉢などがあります。ケヤキの木地に黒漆を塗り、その上から朱漆で「花鳥」や「扇面」を描いています。スタンプで花文を施したものもあり、非常に華やかです。鎌倉時代の一三世紀後半頃のものと考えられます。

漆絵漆器は当時の高級食器です。遺跡からは同じく高級品である中国製の青磁や天目なども出土しており、在地領主など有力者の存在が考えられます。遺跡の周辺は府中と呼ばれる地区で、すぐ西には籠神社があります。この神社は式内社で、丹後国の一の宮です。周辺には、宗教施設や居館の存在が想定できる地名が多く残っており、神社を中心とした当時の繁栄が偲ばれます。

漆絵漆器（難波野遺跡）



うつわ

漆絵漆器

中近世

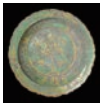
永遠の住処

福知山市山田館跡から中世の蔵骨器が出土しました。日本での火葬は飛鳥時代に始まり、中世には各地でつくられた焼き物が、火葬骨を納める蔵骨器として使われました。この蔵骨器は、現在の愛知県瀬戸市周辺でつくられた瓶です。瀬戸でつくられた焼き物は、とくに中世においては唯一、釉薬を使った焼きもので、中国の焼物を志向しています。こうした焼き物は、古瀬戸と呼ばれています。

この瓶には草木の灰を混ぜた釉薬が掛けられていて、形も中国製の青白磁瓶などに似ています。胴部の全面には菊花のスタンプが押されており、華やかです。火葬骨を納めるため、故意に口の部分を打ち欠いた状態で出土しましたが、石膏で復元しています。

古瀬戸は丹波では出土数が少なく、地元の有力者が所有していたものと考えられます。愛蔵の器に骨を納めてもらったのかもしれません。

古瀬戸灰釉瓶（山田館跡）



うつわ

古瀬戸灰釉瓶（福知山市教育委員会所蔵）

中近世

こんなものもリサイクル

京丹後市弥栄町のシミズ谷城跡は、中世後期の一六世紀に築かれたと考えられる山城です。発掘調査では土師器の皿や擂鉢などが出土しており、実際に山城で生活していた様子がうかがわれます。

調査では、貯蔵用に設けられたと思われる穴が見つかり、中からは青銅製の錘が出土しました。上から見ると六角形で、横から見ると仏像の台座のような形をしています。全体に小さい円形や線形の刻みがあり、繊細に装飾されています。上部の穴には円環があり、紐を通して竿秤で使われたと見られます。貯蔵用の穴からは、太刀を吊るす為の部品「足金物」や兜の頂部にある部品「八幡座」など、城らしい銅製品が出土しています。鍛冶をするための炉も見つかっているので、銅を溶かしてリサイクルするために、銅製の部品だけが集められていたと考えられます。

いったい何に生まれ変わる予定だったのでしょうか。

青銅製錘（シミズ谷城跡）

ツール

青銅製錘

中近世

世界にはばたく磁器

上京区の京都府民ホール建設に先立つ発掘調査では、青花の大皿が見つかりました。青花とは、コバルト顔料で絵付けをした中国の磁器のことです。この大皿は、現在の中国福建省にある漳州窯で生産されたものです。漳州窯の青花磁器は一六世紀後半～一七世紀にかけて盛んに生産され、アジア各地やヨーロッパなどに輸出されました。見込みには空を舞う鶴と雲・草花がおおらかに描かれています。周縁には雲や鳥が廻っていますが、これは初期の伊万里（肥前磁器）に通じる雰囲気があります。

日本では一七世紀初頭頃に肥前で、朝鮮半島の技術を用いて磁器の生産が始まったとされています。確かにごく初期の肥前磁器には朝鮮王朝磁器に似た製品がある一方、中国製青花磁器に倣ったものがあります。それまで中国製の磁器を使っていた日本人には、なじみのある文様の方が好まれたのでしょうか。

青花大皿（平安京跡）

いのり

青花大皿

中近世

秀吉の京

豊臣秀吉は、天正一三(一五八五)年に関白に就任します。天下人となった秀吉は、京都における政庁、居所として絢爛豪華な聚楽第を造ります。聚楽第は、秀吉から関白を譲られた甥の秀次に受け継がれますが、二人の関係が悪化し、秀次が自害させられ、文禄四(一五九五)年に秀吉によって徹底的に破壊され、幻の城となってしまいました。本丸東堀跡と大名屋敷の調査で、大量の金箔瓦が出土しました。金箔の貼り方は武将によって異なり、信長の瓦が凹面に金箔を貼るのに対し、秀吉の瓦は凸面に金箔を貼るのが特徴です。残りの良い瓦は、今も燦然と輝いています。これらの瓦は、使われた時期が特定できる基準資料として、国の重要文化財に指定されました。近年聚楽第の調査で、本丸南辺の石垣を長さ三二mにわたって検出しました。大きな花崗岩を巧みに積み上げた野面積の豪壮な石垣です。金箔瓦とともに、秀吉の栄華を物語っています。

金箔瓦(聚楽第跡)

ツール

金箔瓦

中近世

海の向こうのイケメン

この三彩男子像は、京都府庁西別館の調査で出土しました。施された釉が華南三彩と同じであり、中国南部で明の時代に焼かれたものと見られます。中国の墓に副葬される俑と見られ、男子俑と呼ぶべきかもしれません。日本では調度品として扱われたのでしょうか。

男子像は、幘とよばれる頭巾のようなものを被っています。幘には緑釉が施され、頭上に巻き上げられた部分には黄色や褐色の釉薬が施されています。顔は焼成後に眉、目、髭などを墨描きしています。また幘と額の境には朱線が引かれています。出土地の町名は「勘兵衛町」です。近世初期に京の富者として知られていた三勘兵衛の一人が住んでいたことに由来します。出土地の北側には豪商茶屋四朗次郎の屋敷があり、付近には京の裕福な町衆が居を構えていたようです。この男子像は、上級町衆の屋敷の一室に飾られていた陶人形かもしれません。

むすぶ

華南三彩男子像（平安京跡）

華南三彩男子像

中近世

南蛮の華

華南三彩盤は、京都府庁内の調査で出土しました。「華南三彩」は、緑色や黄、茶、紫色の鉛釉をかけた、色彩豊かな美しい焼き物で、中国南部で生産されたものです。中国明代末期の一六世紀末前後頃の製品と見られます。主要貿易港の博多や堺、大友氏の城下町豊後府内などで出土していますが、そのほかでは出土例が少ない焼物です。

この華南三彩盤は内面見込みには草花がヘラで刻まれています。周縁の部分は平坦になっており、端部は花の形に成形されています。楽焼を始めたといわれる長次郎も華南三彩盤を摸作しており、このような軟質陶器が楽焼のルーツかもしれません。

一六世紀中頃〜一七世紀初頭に行われた南蛮貿易では、中国や東南アジア諸国から多くの品物が博多や堺などの貿易港を経て、都までもたらされました。この華南三彩盤も南蛮貿易船に積まれてきたものでしょう。

むすぶ

華南三彩盤（平安京跡）

華南三彩盤

中近世

詫びを支えた朝鮮半島の茶器

京都府庁内の発掘調査では、朝鮮半島製の陶磁器が出土しました。付近は茶屋四朗次郎などの裕福な町衆がいた場所で、彼らが持っていた茶道具と見られます。

白磁鉢は丸味を持つ器形で、見込みに茶溜りがあります。漆で修復した痕跡があり、大切な器であったと思われます。つくられた年代は一六世紀です。粉青沙器椀は平椀に近い器形です。内外面には檜垣文を線刻しています。「彫三島」と呼ばれるもので、日本からの注文品です。見込みには花文や蓮弁文を印刻しています。上品で華やかな茶椀です。こちらは一七世紀前期頃の製品とみられます。

簡素な「侘び茶」は一六世紀頃から、流行し始めました。格式の高い書院の茶では中国製の天目や青磁を用いるのに対し、侘び茶では朝鮮王朝の焼物がふさわしい茶道具として選ばれたのです。

むすぶ

白磁鉢・粉青沙器椀（平安京跡）

白磁鉢

粉青沙器椀

中近世

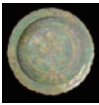
黄色と緑の共演

美濃で、一六世紀後期頃に「黄瀬戸」と呼ばれる焼物が作られ始めました。灰を混ぜた釉薬を黄色に発色させた陶器です。

この鉢は、京都府庁東側の京都府警察本部一一〇番指令センターでの発掘調査で出土しました。寺などで鳴らすドラに似ていることから、「銅鑼鉢」と呼ばれています。黄瀬戸の特長でもある胆礬と呼ばれる硫酸銅を使った緑色の釉薬が器面を引き締めています。平坦な周縁部や端部が花弁のようにつくられている点は華南三彩盤と同じで、影響を受けているものとみられます。内面には、華南三彩盤と同じく、草花文などをヘラで描いています。

見込み中央の文様が失われていますが、わずかに残る葉の形から、大根に復元しました。黄瀬戸では草花のほかに、大根がよく描かれています。大根は春の七草の一つであり、吉祥文といえるのかも。葉文の部分などに施された胆礬が印象的です。

黄瀬戸銅鑼鉢（平安京跡）



うつわ

黄瀬戸銅鑼鉢

中近世

癒しの志野

志野は、一六世紀末頃に現在の岐阜県土岐・可児市一帯にあたる美濃で焼かれ始めた陶器です。白色の素地に半透明の長石を使った釉薬を施すところに特徴があり、白いふくよかな肌をしています。

上京区にある府立鴨沂高校での発掘調査では、志野焼の水差が出土しました。京都御苑の東隣にあり、豊臣秀吉が天正年間（一五七三～一五九三）に京の街中にあった寺院を移転させた寺町の範囲にもあたります。水差はこの地にあった寺院で使われていたと見られます。瓢形をしており、緩やかにうねる注口と把手が付いています。今は失われていますが、本来は蓋があったようです。鉄釉で、間垣や植物がゆったりと描かれています。

把手の一部は、淡い橙色をしています。緋色と言って、陶器を焼く際におこる偶然の発色です。これも志野が愛される特長のひとつです。なんとも、ほのぼのとした器です。

志野水差（寺町旧域・法成寺跡）

うつわ

志野水差

中近世

広がる「ひょうげもの」の世界

織部焼（平安京跡）

古田織部正重然は近世初頭の武将で、茶では千利休の高弟です。利休の自刃後は、豊臣秀吉の茶頭となりました。利休の簡素な町衆風の茶風に対して、華やかな破格の武家風の茶風で知られています。

織部陶は美濃で生産された陶器です。古田織部が係わったとも言われますが、確かではありません。織部陶は一六〇〇年前後の頃、古田織部の全盛期に焼成され始めました。織部陶の特色は、銅緑釉にあり、織部釉とも言います。白地に鉄絵を描き織部釉を施した華やかな焼物です。この特色が最も発揮されたのは、懐石用の向付です。洒脱な絵付けとともに、様々な形の向付が作られました。また、丸い茶椀をわざと歪ませて不定形にした「沓茶椀」も作られました。古田織部が催した茶会で沓茶椀と思われる器を見た茶人は、「ヘウケモノ也」と日記に書き残しています。このような新しい形を造り出した織部陶の創造力は画期的です。

うつわ

織部向付

織部沓茶椀

中近世

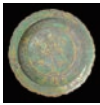
唐津で一杯

京都府庁(中京区)の一角でおこなった発掘調査では、ゴミ捨て用と見られる深さ三mにも及ぶ穴が見つかりました。裕福な町衆がいたと考えられる場所ですが、その中には唐津焼と呼ばれる陶器も捨てられていました。

唐津焼は、朝鮮半島から伝わった技法によって、現在の佐賀県で一六世紀末から始まった陶器と言われています。片口のほかに、一合も入らないような徳利があり、茶会の懐石にでも使われたのかもしれません。その時に交わされた会話が聞こえてくるようです・・・・・

「せっかくの席やさかい商売の話でも・・」「ちょっと前に孫が・・」お茶と料理をいただき、お酒も少々いただいて。それで終わればよいものを。「この徳利はちょっとしか入りまへん。めんどくさいよって、片口に酒を汲んどきますんで、お好きに」。さっきまで上品な料理が入っていた器に漬物を山盛りにして。京の一夜は、こうして更けていきました。

唐津焼(平安京跡)



うつわ

唐津焼　（徳利の残存高 10.2cm）

maibun35 kyoto-fu

平成29年３月31日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三 星 商 事 印 刷 株 式 会 社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141

maibun 365

kyoto-fu

maibun

直観的にページがめくれる操作性。
京都の考古遺物が楽しくわかる。